中野重治全集

十四

中野重治全集

筑摩書房版

中野重治全集第十四巻

昭和三十八年一月二十五日

定価　六八〇円

著者　中野重治

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八　古田晁

印刷者　東京都板橋区志村町五　柳川太郎

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八　筑摩書房
電話東京（291）七六五一（代表）
振替東京一六五七六八
印刷凸版印刷株式会社
製本株式会社高陽堂

© 1963. Shigeharu Nakano (Printed in Japan)

目次

事実と解釈……三
小説散歩　一……八四
小説散歩　二……九三
小説散歩　三……一〇三
小説散歩　四……一一三
学問と幸福……一二一
中学生時代……一三一
「狐のわな」について……一三四
『両地書』と『十二年の手紙』とについて……一三六
「カチューシャ（復活）」から……一五四

異議あり……一五七
科学的な不断着でほしい……一六四
三人の文章家……一六八
論争と私……一七〇
『ロダンの言葉』と『明るい時』……一七六
ささやかな記憶……一七九
光太夫、ゴンチャロフ以来……一八四
小林多喜二の一面……一九三
「おぼつく」という言葉……二〇四
芥川龍之介の「毛利先生」……二〇七
そのものとしての戦い……二一二
チャタレー裁判と北原武夫……二二〇
「潮騒」と大人気のない話……二二八
子供のための、少年少女のための文学について……二三四
映画雑感……二四九
やはり早すぎた……二五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藝術家をはぐくむもの……三五九
一つの生涯……三七六
今日の文学の問題……三八三
想像する力……三九六
荒つぽく言えば……四〇二
「荷車の歌」と「沖縄島」とについて……四〇五
教師の詩……四一三
今とプロレタリア文学の時代……四一五
十一月末現在旅さきでの感想……四一八
日本語を大切にするということ……四二六
解題（且原純夫）……五二八
作者あとがき……五三五

中野重治全集　第十四巻

事実と解釈

一　言葉づかいについて

今年はじめ、私は「一九五六年の問題の一つ」という文章を書いた。今年、一九五六年にはいろいろの問題が予想されたから、そのうちの一つについて私は書いたわけであつた。そのなかで私は杉浦明平の文章にふれた。それは『新日本文学』の一月号と二月号とに発表された。すると、つづいて三月号に、「事実を見る立場の相違について」という杉浦の文章が発表された。私が杉浦にふれた点を取り上げて、それをもう少し、あるいはかなりに大きくひろげ、日本共産党の内部問題にまで網をかけての私への反駁であつた。そこには、「これなども、中野さん、おまえさんたちの仲間げんかと何か関係があつたのかい。」といつた言葉があつた。「そういうかけひきはむしろ中野の方が上手だとわたしは思つている。」といつた言葉があつた。「もちろん、新日本文学会は中野一座とはちがうものである」とか、「ついでに中野重治に『やにさがる』という日本語について教えておきたい。わたしはあまり人に教える機会がないので、一言つけ加えさせてもらう……このようなお茶坊主的批評を読んで腹を立てないでいる中野の状態をば『やにさがる』というのである。」とかいつた言葉もあつた。

言葉は杉浦の論旨そのものではなかつた。しかし私には不愉快であつた。それは、私に、頭がわるいとか気が利かぬとかいわれるのは仕方もないが、駆引きをしているとか、駆引きが上手だとかいうことは、いわれたくないという気持ちがあつたからであつた。新日本文学会のことを世間ではとやかくいう。私のことをもとやかくいう。しかし、新日本文学会と私とを、「中野一座」といつた言葉で結びつけることはしてほしくないという気持ちがあつたからであつた。けれども、孤立無援だとか、八方から袋叩きになつているとかいわれるのは我慢もしようが、お茶坊主に取り巻かれて、やにさがつているなどとは思われたくないというこの気持ちの底には、いくらか日本風の、壮大なヒマラヤのような喜劇により も、日蔭の花のような、じめじめした悲劇ないし悲劇まがいの方に曳かれるというありきたりのものがまじつていなかつたとはいえまい。それならば、それは末の末の問題である。私を不愉快にしたほんとうのものは、むしろ、杉浦のこういう言葉が、事がらにたいする杉浦の腹立ち、私にたいする憎悪のほとばしりとして発していなくて、はからいとして、駆引きとして、効き目を勘定に入れてのいやがらせとして書かれていることであつた。

杉浦は、宮本百合子が必ずしも常に円満具足してはいなかつたと私が書いたのについて、「円満具足」に何度かからんだあとで書いている。

「くりかえしていうが、わたしは原則が正しければ、円満具足でなくてもいいことをみとめる態度に反対なのである。少くとも円満具足になつてゆこうという努力がみとめられないかぎり、反対なのだ。それは、目的が正しければ、手段をえらばぬ、といいかえられるからだ。これは政治運動や文学運動を陰謀ごつこに変えてしまうおそれがあり、マキアヴェリズムの独り舞台となりがちだからである。わたしが、当時の論争から感じとつたことを説明すれば、だいたい、そのようである。そして、それは人間的信頼の問題ともかかわりあつていた。」

いつたい、杉浦は、「中野の説明はわたしの記述が事実の正反対であることを納得させてくれなかつた。そこで、わたしじしんの記述のあいまいだつた部分を補足しながら、中野と何がくいちがつているかを明らかにし、またわたしにはつきりしない事実を中野に質問してゆきたい。」というところから「事実を見る立場の相違について」を書き出していた。問題のこの本旨からすれば、私にたいして、「つまり生れつきか、幹部ボケにかかつているか、どちらかである。」とか、お茶坊主に取りまかれてやにさがつているとか書く必要は、杉浦において毫もなかつたのであつた。「これなども、中野さん、おまえさんたちの仲間げんかと何か関係があつたのかい。」といつたひやかしの軽い調子は、問題の性質上、出てくることのできぬものでもあつた。こういう調子は、怒りのおもむくところ、論理の必然において発したものとは見ることができなかつた。それだからそれは、私にたいして藝術的な姿でとどめの一刺しとなることができなかつた。しかもこの調子が、「原則が正しければ、円満具足でなくてもいいことをみとめる態度に反対なのである。少くとも円満具足になつてゆこうという努力がみとめられないかぎり、反対なのだ。」という本人から、取りも直さず、彼自身の「円満具足になつてゆこうとする努力」のあらわれとして示されたのだから私は不愉快になつたのであつた。

あるいは、もともと杉浦に、この種の問題についての基本的勘ちがいがあつたのであつたかも知れない。彼の魯迅論などからもそれは疑われる。

杉浦は、『文学』十月号の「論争における魯迅」のなかで書いている。

「上にあげたような論争であつたら〔これは、『斎藤茂吉が太田水穂と石槻茂をやつつけた論争』、『中野重治が雑談でねちねち敵に食いさがつていつたやり方』などを指して杉浦はいつている。〕じぶんの欠陥や弱点にはぜんぜんふれる要を見ない。いかにエゲツなくても、相手を叩き伏せれば足りる。いわば、戦場での合戦と同じで、勝つためにはあらゆる手段がゆるされるらしい。もちろん、魯迅は騎士道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にのつとつて論争したわけではない。かれがフェアプレイは中国では時期尚早であつて、尾つぽを巻いて逃げるチンコロをあくまで追いつめ、どぶにぶちこむべきことを強調したのは有名だ。いな、じつさい、かれは売国的な軍閥政府の手先にたいして、プロレタリア文学者から民族主義者に一八〇度転向した裏切ものにたいして、その他、かれの攻撃の対象にたいして、情容赦なく、人身攻撃とみえるまで徹底的に憎悪と侮蔑とをもつてむかつた。中でも『新月』派の詩人邵洵美にたいしては一番こつぴどくやつつけている。魯迅は邵をば「といつて杉浦はそれを紹介している。」……たぶん、今、この国でこのように、人身攻撃にわたる文章を書いたら、ケンケンゴウゴウたる非難の埃りを浴びておもてをあげることもできないだろう。けだしりつぱな論議というものは、個人的感情ぬきで、美しい礼儀正しいことばと公平な態度とをもつてすべきだと考えられているらしいからである。」

「だがわたしは魯迅のやり方にまつたく同感する。なぜかならば、かれは一つの問題、それが国民的な弱さにかかわり、あるいは民族解放のさまたげとなりうると感じたばあい（そう感じたからこそ、かれは取上げるのだ）、いかなる一般的問題も一般そのものとして存在するのでなく、だれか単数または複数の現実的人間に媒介されてあらわれるのであるから。かれはかれの全人間的存在をもつてその問題にぶつかるかぎり、感情ぬきで冷静公平な発言をすることができなかつたし、またよいところもあり悪いところもあるから、両方を合せて二で割るという生ぬるい折衷主義をとることができなかつたのである。それゆえ敵の全存在を憎むか嘲るかせざるを得なかつた。」

してみれば、杉浦は、魯迅が「『フェアプレイ』は時期尚早」を書いたのをみて、魯迅その人が反フェアプレイに出たものとしてこれを受け取つていたのだろうか。「今、この国で」、つまり今、この日本で、魯迅の「ように、人身攻撃にわたる文章を書いたら、ケンケンゴウゴウたる非難の埃りを浴びておもてをあげることもできないだろう。」と書いているのをみれば、杉浦は、魯迅のあの種の文章を、フェ

アプレイでないところの、「人身攻撃にわたる文章」としてほんとうに考えているのだろうか。

けれども、事実をみれば――「事実を見る立場の相違について」とまではいわない。――その一歩手前、事実そのものについてみれば、魯迅こそフェアプレイの道を進んでいたのであつたことがよくわかる。あのとき、林語堂が、「改革者に対する反改革者の毒手は、これまで決して緩められたことはなかつたし、手段の悪辣さも、もはやその極に達している。改革者がわにも反改革者がわにも通用するようなそういうフェアプレイを説いてこれをば「奨励」した。それは、具体的には反改革者流の「毒手」に加担することであつた。そこで魯迅が、秋瑾女史の場合、また劉百昭の「先例」をあきらかに引いて、フェアプレイ一般にではなく、林語堂の説いたほかならぬこの種のフェアプレイに反対したのであつた。中国の改革者たちが、「今後は、態度と方法とを多少とも改めることが必要である」といつた魯迅は、「よいところもあり悪いところもあるから、両方を合せて二で割れ」といつた林語堂のにせのフェアプレイにたいして、ほんとうのフェアプレイ、中国発展の歴史のフェアプレイを対置したのであつた。杉浦が「人身攻撃にわたる文章」と見た魯迅の邵攻撃は、「美しい礼儀正しいことばと公平な態度とをもつて」書かれなかつたのではなくて、「美しい礼儀正しいことばと公平な態度とをもつて」書かれたのであつた。毒にたいしては解毒剤を投じるのが人間として正しい。とびかかつてきた狂犬にたいしては、これを撲殺するのが人間として公平な態度となる。「たぶん、今、この国でこのように、人身攻撃にわたる文章を書いたら、ケンケンゴウゴウたる非難の埃りを浴びておもてをあげることもできないだろう。」と杉浦はいうが、もし今、日本で、ある個人にたいする魯迅ほどの攻撃文章が出たとすれば、杉浦とは反対に、その書き手がではなくて攻撃された方こそ「おもてをあげることもできないだろう」と私は思う。

魯迅の邵攻撃は、その本質からみて決して何の「人身攻撃」でもなかつた。それは、「さまざまの筆

名で、編集先生と検閲旦那の眼をごまかしつつ」書いたにもかかわらず魯迅が嗅ぎつけられ、「結局どこにどう隠れてみてもだめで、半年とたたぬうちに一層はげしい圧迫を蒙ることになり」、魯迅の「筆墨が、仮面をつけて指揮刀の下から突貫して来る英雄連中に到底敵し得ぬ」とみえたとき、しかも横あいから飛び出してきて、この魯迅に物かげから一太刀あびせようとした人間にたいし、退く魯迅が、退きながらの一なぎでこれを倒したものであつた。それは本質的に個人的な「感情ぬき」の文章、中国の改革と中国の文学との「人身防衛」の文章、「人身擁護」の文章であつた。それは正しい目的にふさわしく正しい手段に訴えられ、目的と手段との合致がみごとな藝術的出来映えをも見せたものであつた。「人身擁護」が尊ばれて「人身攻撃」が鼻つまみされるのは、「人身攻撃」が一般に「攻撃」であるからではなかつた。それが、問題の本質をそらしたところで相手を攻撃し、この不正な攻撃にかくれて、問題の本質的な点でも相手を攻撃したかのように、またこれを撃破したかのように見せかけるためにそれは鼻つまみされるのであつた。よたもの、やじ馬めいた口をきくことでほんものの攻撃が成るのではなかつた。「何がくいちがつているかを明らかにし、またわたしにはつきりしない事実を中野に質問してゆきたい」というところから外れて——私への攻撃ならば、「くいちがい」の説明そのこと、私への「質問」そのものが攻撃でなければならなかつた。——くすぐり言葉、いやがらせ言葉によつて、説明、質問の途中打切りをおぎなおうとしたために杉浦の言葉が浮いたものとなつたのであつた。

誤解その他に基くとしても、本人がほんとうに腹を立てての言葉であれば、普通には許せそうにない言葉も許される場合がある。井上光晴は、『新日本文学』七月号の「微妙な問題」のなかで、私について「中野の卑怯となしくずしを感ずるのである。」と書いている。この言葉は私に不愉快であつた。しかしそこに、杉浦の場合にくらべての明らかなちがいがあつた。井上は、『中央公論』六月号に書いた私の「芥川賞について思い出」から引用して彼の言葉を書いている。

私はこう書いた。

「島尾敏雄の『ちっぽけなアヴァンチュール』のことで議論があつた。永松習次郎の『附和随行』のことで議論があつた。一番大きくは宮本百合子の作品のことで議論があつた。一番大きかつた場合でいえば、一隊の人々が、揃いのねじり鉢巻でなぜ彼女の作におそいかかつたかというと、それは、彼らの間に、宮本百合子の作品の高さにたいするほぼ一致した評価があつたせいだつた。宮本百合子の作品が、日本の文学にある新しい高さをあたえたこと、そのため、それが日本の読者に強い実質的な影響をあたえる事実、このことにたいするほぼ一致した認識が彼らにあつて、つまり、宮本百合子の作品が立派だという見解の一致があつて、そこで一隊が『かかれッ！』となつたのだつた……」

これを引いて、井上は、「と書いているが、彼らとか一隊とかいう言葉の曖昧さは別として、中野は何故に『議論があつた』ことの前提に島尾、松永を引用しながら『書かれざる一章』を落すのであろうか。前提をそう重大に考えていないといわれればそれまでだが、宮本百合子評価にそのままつながる質の『議論があつた』のはむしろ『書かれざる一章』ではないか。私自身その作品の作者として右のように強調することに、ある意味での面映ゆさをまぬがれえないが、中野の書く『一隊』と闘うためにこそ『書かれざる一章』は書かれねばならなかつたのだ。単なる前提引用のつけおとしの問題ではなく、かつて（何年前になるか）『民衆詩選』（『人間』）に掲載した私の詩の解説に『ほかならぬ《書かれざる一章》の井上光晴である』と書いて正当に『一隊』と闘い、また別の場所に私の小説『病める部分』を主題と少しずれた個所を捉えてまで引用した中野だからこそ問題にするのである。」と書き、つづけて、「問題はりきむことがおかしいぐらい微妙だが、微妙だからこそりきむのである。この微妙な後味の悪さに私は中野の卑怯となしくずしを感ずるのである。」と書いている。

なるほどこのへんは、「微妙」な点でもあろう。私は、古い例として島尾を、新しい例として永松を

もちだし、よく知られた大きい例として宮本百合子をあげたのであつて、他意あつて「書かれざる一章」を「落した」のでなかつたことは、「思い出」そのものを読めば普通にわかるものと考えている。けれども、井上の言葉に一理はありえよう。ただ私は、そこからいきなり「中野の卑怯となしくずし」を引き出されたのにたいしては、井上の文章を七月号で読んだときも、これを書いている今もそれを納得することができない。「微妙な問題」そのものの限りでは、井上の説明に不十分があつたのではないか。井上は、問題をやや独り合点に、彼の思いこみに即して彼自身のなかでふくらませ、「微妙な後味の悪さ」、「中野の卑怯となしくずし」といつた言葉をいわば直感的に書きつけたのであつただろう。

むろんこのことは、必要とあらば私と井上とのあいだで争うべき問題となる。いま言うのはそれではない。「卑怯となしくずし」うんぬんの井上の言葉と、「やにさがり」、「かけひき」うんぬんの杉浦の言葉とのあいだで、私にあたえた不愉快の質がちがつていた事実である。井上は、ひとりで憤慨してしかじかと書いている。些細な点ながら彼は全身でそれを書いている。杉浦は遊びとしてしかじかと書いている。杉浦は、逃げ道をあけておいてそれを書いている。主観的にもしろ、行きついた最後のところ、したがつて全身で責任を負うものとして彼はそれを書いていない。しかしそれさえも私の言いたい大事ではない。私は、井上の腹立ちまぎれらしい言葉にも、事実腹立ちまぎれだつたとしても賛成しないのである。私は賛成しない。

論争は必要である。それはどうしても必要になる。けれども、論争のためにあるわれわれの条件は、魯迅が「『准風月談』後記」を書かねばならなかつたときの条件とは、完全に、あるいはかなりに違つているだろう。腹立ちまぎれの言葉ででさえ、われわれがつつしんで悪いわけは決してない。われわれのところにある民主的自由の条件が、それがある程度のものであるだけにかえつてそれを要求しているといわなければならない。

「戦後十一年間の進歩運動の歴史のなかで、進歩的な人間の相互のあいだに、はげしい不信や絶望や侮蔑や恨みや呪いやがひそかに、または公然と形成されるようになり、それを内部から挑発するような動きも発展した。どれだけかその傷を心の深部にまで受けなかつた者はないであろう。尊敬と信頼と愛情とを人間的な条件とする組織的連帯は汚され、組織の成員であることをやめて去つていつたすぐれたひともすくなくなかつた――しかし、蓄積されてひそめられている不信や侮蔑や憎悪やは、進歩的運動を無力化そうとねらつている勢力にとつては、最もつごうのいい手がかりである。」

「共産党員をとりあげた一連の小説について」という文章（『アカハタ』九月十日号）で、小田切秀雄はこう書いている。私は、小田切が、「不信や絶望や侮蔑や恨みや呪いやがひそかに、または公然と形成されるように」うんぬんといつたことを、しきりに、いくらか愛着をもつてさえ書いてきているのではないかとも思う。けれども、肝腎のところは小田切の言うとおりにちがいない。「不信や侮蔑や憎悪やの終局的な、また実際的な打開は、共同の敵にたいして本気になつてたたかうこと以外にはない。平和と自由と生活とのためのたたかいは、それの実際の運行がつくりださざるを得ない協力関係、組織的な支え合いの必要ということを通して、しだいに心の内がわのしこりをほぐしてゆくのであろう。」という小田切の言葉は、「しこりをほぐす」ための心くばりが、必要ではあつても不必要ではないこと、この種の心くばりが、決して無差別な抱合いを意味するものでないことをも含んでいはしなかつたか。それは必ず含んでいなければならなかつた。

杉浦は、「魯迅の論争から、いまわれわれがまなぶべきことは、不寛容の精神。」と一言のもとに断定している。そこでそうとしよう。それならば、魯迅の「不寛容」は敵にたいして決定的であつた。自分のあまえた心持ちにたいしてはきわめて寛容、寛容以上であつて、この甘えた心持ちで測つて敵とみとめたものにはきわめて不寛容、不寛容以上といつたものではそれはなかつた。「いつか、わたしは、清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com